

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

徳島県立川島中学校
「学力向上実行プラン」

○ICTを活用した、主体的・対話的で深い学びのある授業の実践
○6年間を見通した計画的・継続的な中高一貫教育の推進

【小中連携または中高連携における共通の取組】

ICT(タブレット・電子黒板・デジタル教科書)を活用した、主体的・対話的で深い学びのある授業に取り組む。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○各教員が至誠ノートの指導を丁寧に行うことで、生徒が生活習慣や学習習慣を見直す機会が増えてきている。 ●基礎的・基本的な知識・技能は定着しつつあるが、自分で復習する習慣が身に付いていない生徒がいる。	・目標(定期考査など)に向けて自分で学習計画を立てられ、見直しをもって学習に取り組むことができる。 ・日々の授業に意欲的に取り組み、基礎・基本を確実に身に付けている。 ・自分で復習する習慣を身に付けている。	・中高合同の教科会や授業見学・研究協議を深め、6年間を見通しをもてるよう指導計画を見直す。 ・課題演習を1週間単位の学習を振り返る質問タイムや各種検定対策として位置付け、主体的に学習する態度を養う。 ・生徒1人1台端末を活用し、自主・自律的な家庭での復習や振り返りを継続的に進めるよう指導する。	・計算力や語彙力の定着を図るため、授業で計算練習や小テスト等を実施し、確実に解けるようにする。 ・身につけた個別の技能を、他の学習や生活の場面で活用する力の育成をする。	・単元ごとの確認テストや単語・計算・文法の小テストを授業のはじめに実施し、基礎・基本の定着につなげた。 ・英語自主勉ノートを継続させながら、3行書かせ添削を行ってきた結果、ライティング力の向上だけでなく、辞書で調べるなどして自分が言いたいことを進んで表現しようとする挑戦行動が見られるようになった。	・「質問タイム」については、一部の生徒しか質問をしようとしていない現状があるため、質問をする方法(ICTでのチャットなど)を工夫し、気軽に質問できる環境づくりを教員間で検討する必要がある。 ・課題を提出せず、基礎・基本の力を身に付けないまま先に進んでいる生徒も多い。週末課題が生徒をさらに受け身にさせていることもあり、週末課題の廃止も含め、学校全体で見直しを図る必要を感じる。(自主勉強ノートの質や量の充実など) ・教員は提出した自主勉ノートや課題に検印するだけでなく、少しの赤ペンを入れる努力を惜みず、生徒のやる気を引き出していく。 ・至誠ノートが効果的に活用できていないため、PDCAサイクルを意識し、家庭学習の定着や計画的な勉強が身に付くよう振り返りの視点をもった使い方を検討する。

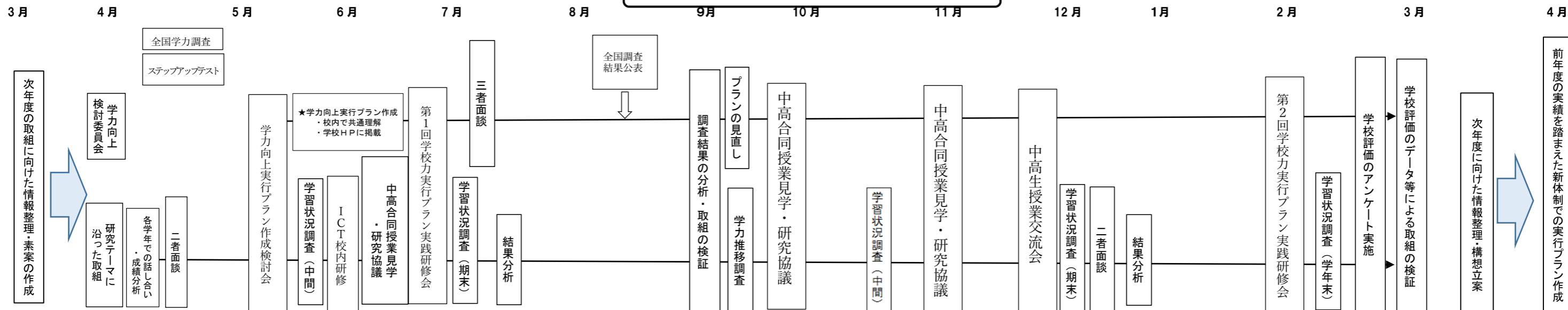
(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○各教室の電子黒板や生徒1人1台端末の活用が広がり、生徒がICTを利用した学習に慣れてきている。 ●主体的に考え、判断しようとしていたり、他者の意見から考えを深めたりすることが苦手な生徒が多い。	・ICTを活用して、互いの考えを共有したり他者と協働したりしながら課題に取り組むことができる。 ・他者の考えや新たな知識を取り入れながら、様々な視点でものごとを捉え、自分の考えをより深めたり修正したりすることを通して、新しい課題の設定や新しい考え方を表現することができる。	・小単元ごとにICTを活用して、互いの考えを共有する場面を設定する。また、他者と意見を交わし、自分の考えを深めたり修正したりする場面の設定や、自ら思考・判断したくなるようなアウトプット型の課題設定に取り組む。 ・ホワイトボードやICTを効果的に活用した発表等の言語活動を行わせる。 ・生徒の発言や発表の内容に応じ、「なぜ」、「どうして」などの更なる発問を行い、生徒の考えを深めさせる。 ・生徒の個性や特性を生かしながら、安心して自己表現できる学級づくりや授業づくりをする。	・書く・話す力をつけるため、学んだ知識・技能を実際に活用する場面を設定する。 ・ICT等を活用し、文章を要約する機会をつくる。	・今年度はICTの不具合も多く、ICT活用場面が制限されることもあったが、従来の模造紙やホワイトボードなどを用いて、それぞれのよさをいかして発表したり、他者の意見を聞き、自らの意見を深めさせることができた。 ・1時間に1回は意見を交流する機会をもち、表現活動を充実させることができた。 ・ほめ言葉シャワー、フリートーク、エンカウンターなどでの関わり合いを通して、安心して自己表現できる基盤ができていく。 ・あわ文化調べの協働作業により、探究の過程で必要な思考・判断・表現力が成長していることが授業の見取りや成果物によって確認できた。 ・授業で学習したことを次時に発表(前でパフォーマンス)する授業スタイルを継続してきた。それによって習ったことが家庭学習につながり、家庭学習でつけた力を級友に披露するというサイクルが生まれ、基礎基本の定着だけでなく、他者から学ぶことで表現力が豊かになった。	・フューチャーの探究学習では、学年が上がるにつれ、少しずつ教員の手助けを少なくしていく。協働作業ではあるが、生徒自身が見通しを立ててできる方向に移していく。その見直しを学年団が共通理解した上でPDCAサイクルをまわしていく。 ・生徒間で「なぜ」「どうして」が自然と出るように、教育活動全般で促していく。 ・自分の意見を主張しにくい生徒が多いことが課題であるため、ICTを活用したり、意見を言いやすい雰囲気づくりをする必要がある。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○「コンピュータや電子黒板は、学習活動の充実に役立つ」と思う生徒が100%であった。 ●各教科のバランスを考えた学習計画を立てて取り組むことと、継続的に自学自習をすることに課題がある。	・個々の生活経験や学習経験を生かすとともに、生徒1人1台端末を活用して、学習の補充や予習など主体的に取り組むことができる。 ・各種検定への挑戦など、自ら高い目標を定め、主体的に学習し課題に取り組むことができる。 ・先輩に学び、自分の将来の姿を想像し、未来を切り開く力を身に付けている。	・長期休業中において、端末を活用し、生徒の日常生活や将来の夢につながり、自ら調べたい課題をもち、自律的な探究活動に発展させる。 ・国数英の教科担任が検定の受験者数が増えるよう数値目標を設定し、生徒に目標をもたせる。 ・「SA」や「先輩から学ぶ」、また、中高合同の行事等を積極的に活用し、触れ合える場を増やす。	・つまづきに対し、自ら問題解決の糸口に気づけるよう助言をし、問題の解法を自分の言葉で説明させる。 ・生徒の主体的な体験や活動を授業に多く取り入れる。 ・学習課題の提示を明確にする。 ・課題を解決するための道筋を生徒に考えさせ、数学的な実験や演繹的な方法によって解決する活動等を設ける。	・「SA(スペシャルアプローチ)」や「先輩から学ぶ」が学校生活に役立つと感じている生徒が86%おり、6年間を見直しをもつことができていく。 ・自尊感情を高めたり、生徒自身が自己決定感をもてるような活動を仕組んだりすることにより、様々な場面で能動的に取り組む生徒の姿が見られるようになった。 ・個人やチームでの活動後の自己シートから、「もっとうまくやりたい」「もっと伝えたい」など、生徒の主体的・協働的な学びが実現していることが見られる。 ・各種の学年表彰(セミナーテスト・学級旗デザイン賞・調理アイデア賞・チームの笑顔賞など)や担任からの承認シート、自尊感情を高めるポートフォリオなどの取り組みや、生徒の記述や検定受験人数により主体性が育ってきていることがうかがえる。	・「SA」や「先輩から学ぶ」の有用性は示されているので、中高合同の行事や高校との交流を増やし、先輩から学ぶ機会を生徒のやる気につなげていく。(3年生・2年生が1年生に何かを教えるなど) ・検定の受験者が増えるよう、データを示したり、常に授業で日頃から目標をもたせて意識を喚起させておく。 ・主体性を高めるためには、他者からの承認という働きかけが必要であり、教科・道徳・人権教育・学活などで心理面も育てながら、生徒一人ひとりが自分の価値を確認できる経験、教員から生徒、生徒同士の承認の文化を今の教育活動に少しずつ加えることが必要である。そのために、例えば、至誠ノートの(金土日)は週末日記として3日分のスペースに内親日記などを書かせる。内親日記は生徒自身が自己を振り返るだけでなく、担任も自分も知らなかった生徒のよさを、その日記によって知ることができる。

令和5年度 学力向上ロードマップ



学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員 教頭:前田綾博 教務主任:安部恭美 社会科主任:庄野雄介 国語科主任:日根通世 理科主任:田本祐太 数学科主任:上田義弘 英語科主任:板東照美
教諭 浦上 愛	

校長

中村 ゆかり

【各校の取組状況の把握について】

中高合同の授業見学や学習状況調査など、さまざまな機会を捉え、取組状況の把握を行う。